Concert バイエルン放送響がオール・バッハで定期演奏会

バロックのスペシャリスト、ジョヴァンニ・アントニーニが指揮するオール・バッハ・プログラムとして、ミュンヘンの音楽ファンから注目されていたバイエルン放送交響楽団の第4回定期演奏会を、6月21日に聴いた。

青い光沢のあるスーツ姿で登場したアントニーニが、間髪入れず棒を振り下ろすと、聴き慣れたこの楽団の音がバロック時代にワープした。しかしそれは厳格に尖ったJ.S.バッハではなく、豊満な響きを含んだものだ。まろやかなレガートを感じさせるバイエルン放送響は、屈伸をよく使う指揮法のアントニーニのジェスチャーから想像される音楽より、もっと地に足が着いている。「管弦楽組曲第1番」は、ファゴットのみ多少ストレスを感じた以外は、傑出したオーボエ、フレージングが上手いヴィオラ・セクションが光り、全体の盛り上がりも上手に構成していた。

放送響合唱団も加わった「教会カンタータ第135番」では、コンサートマスターも本領発揮し、スイス人テノールのファビオ・トゥリュンピーの確信を持った歌唱、チューリヒ歌劇場のメンバーだった頃より格段成長したクレシミール・ストラザナックの柔らかいバス、ハスキーだが細部まで端整な歌唱を聴かせたローレンス・ザッツォら、ソリスト陣も満足感を与えた。

休憩後はJ.S.バッハの息子カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ「弦楽のための交響曲」Wq182-1で始まり、次にプログラム最後となるJ.S.バッハ「教会カンタータ21番」を好演した。ソプラノのクリスティーナ・ランズハマーは合格点ではあるが、有名なアリアでは、首席オーボエ奏者の名演奏に圧されていた。

（中 東生）

名演を聴かせたバイエルン放送響のオーボエ奏者たち。左が首席奏者のラモン・オルテガ・ケロ ©P.Meisel